書評

福井県地域史研究 第五号

三上一夫

福井県地域史研究会では、このほど『福井県地域史研究』（第五号）を刊行したが、従前どおり会員五名のそれぞれの専攻

の分野による精力的な論稿を収録している。

まず松原信之氏の「朝倉光玖と大野領」は、朝倉氏の領国支配体制の確立に重要な役割を果しながら、これまで研究未開拓の光玖に視点をすえ、その人物像を浮き彫りにした労作である。

また大野郡代（郡職）を継承した朝倉右衛門大夫景高とその子式部大輔景鏡を関係史料により詳さに検考して、朝倉経景―景職―尹景―景鏡の系譜の誤りであることを指摘して、従来の一向一揆、真宗史などの研究の中で云々されていた天文十年の朝倉氏による本願寺との妥協策が全くの誤りであることを論証した。そして実は孝景・景高兄弟の不和による朝倉家内紛の結果、景高が本願寺と結んで宗家に対抗した史実として訂正さるべきもので、その内紛に敗れた景高の怨念が、その子景鏡に引き継がれ、ついに義景に対する裏切となり、朝倉氏の滅亡を導く結果ともなったことを詳さに検考している。従って従来の定説化したところを、全く否定する新説を打ち出した点が大いに注目されるわけである。

次に本川幹男氏の「十八世紀における村の変質」では、幕府領檜曽谷村（現勝山市北郷町檜曽谷）につき、大部な津田家文書（津田彦左衛門所蔵）を分析、検考して、十八世紀における越前の幕領農村の一類型としての変質過程にメスを入れた論稿である。

まず村の構成につき、村高の実態や農民層分解を中心に、関係史料による精密な数々の統計資料を作製して検証し、さらに封建権力支配側の収奪政策の動向を経過的に考察した点が、ひときわ精彩を放っている。

一方、十八世紀初頭から前期の元禄・享保期より同世紀中期の宝暦・明和期にかけての村落の質的変化を、農民的結合が経済的関係において崩れていく過程に視点をすえて、検討している。そしてこのような村落の貧窮化傾向が、隣村の勝山領での元禄十年、明和八年、天明六年にみられるような百姓一揆や打ちこわしを計画したり参加することをはばみ、また村方騒動も表面化させなかったものと結論づけている。当時の越前における反封建闘争激化の一般的動向に対する幕府領檜曽谷村の特殊、歴史的な事象を実証的に追究したところに、甚だ興味深いものがある。

また吉田叡氏の「江戸時代後期における福井藩御用商人の一考察」では、御用商人の給禄を中心に、江戸時代後期の福井藩と結びついた商人の動向を、『松平文庫』の松平斉承・慶永の給帳や「諸役人并町在御扶持人姓名録」の史料を検討することにより、明らかにしようとしたものである。

特筆されるのは、この時期を通じて新旧両商人の交代がみられ、藩財政の窮迫化にともない、藩側のこれら商人層への依存度がますます高まったことで、とくに領内では、福井城下の商人の比重よりも、在方とりわけ三国商人が果す役割が極めて大きくなるのが注目される。

さらに江戸・京都・大坂など他国出入り商人に対する依存度が、幕末になると一段と著しくなるが、このことは、藩の領内借金政策が限界に達したのを如実に示すもの

であり、こうした視点による吉田氏の検証は高く評価さるべきであろう。

一方舟沢茂樹氏の「福井藩の卒族について」では、福井藩における家臣団の約五割を占める卒族の存在形態が従来ほとんど解明されていなかったのに、検考のメスを入れた労作である。『松平文庫』の「福井藩役々勤務雑誌」「新番格以下諸下代迄」などの関係史料を駆使して、目見以上と目見以下に大別される卒の構成状況、つまり功によって士に昇格できる上級卒と年功により目見以上の役職に昇進できる中級卒、さらに身分・役職・給禄が固定した下級卒のそれぞれの存在形態や特質を明らかにしている。

また上級卒の役方の諸職は、士の末席新番組と同じく勝手役をはじめ行政実務の要職を占め、中級卒は下代等の事務職・中判等の技術職や坊主の給仕役で、いずれも藩政の実務を処理するものであり、さらに下級卒は平時において支配頭の任務に応じて御門警固、町在の警ら、普請夫役等にかかわるなど、各級の役職の実態について明快な分析解明を試みた点は大いに着目してよい。

藤野立恵氏の「丸岡藩に於ける天保八年の改革—史料と解説—」では、坂井郡春江町藤鷲塚の久保家所蔵の史料のうち、「史料A」には、久保家から大坂の豪商にあてた書簡と、久保家から藩に差し出した歎願書十七通がまとめられており、「史料B」には、久保家から大坂豪商あての藩政改革案がおさめられている。これらの史料により、丸岡藩に藩費の融通を行なった大坂の豪商や藩財政にかかわる勘定方はじめ問屋商人、有力地主等の動向や、藩政改革の具体内容がうかがえる点で極めて貴重なものと思考される。

このさい藤野氏は、藩当局が財政改革の主導性を失い、大坂豪商や領内大商人の力に支配される傾向を強めたことを論証している。また福井領の富豪久保庄右エ門の農業経営の実態や金融商業活動につき、その経済力の意外に大きなことを端的に指摘している。要するに本史料は、従来とかく不分明な丸岡藩の藩政改革を検討するうえで極めて重要意義を有するものとみられ、今後さらに久保家文書の残余の分についての調査研究が期待される。

なお最後に本川氏が、昭和四五年より四九年までの越前若狭文献目録（近世篇）を丹念に収録している。